

# サイエンス コミュニケーターだより

Volume 4  
April 2017

<http://kahakusca.edoblog.net/>

みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや 200 名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

## サイエンスコミュニケーターの声

### 科学番組ディレクターという仕事 ～科学と社会の“橋渡し”を目指して～

「理系の大学院まで進んだのに、なぜわざわざテレビ局に？」と聞かれることがある。自分でも「うーん、どうしてだっけ？」なんて考え込んでしまうのだが、最近、学生時代になぜこの仕事を目指したのかを思い返す出来事があった。大学院時代にお世話になった研究施設を、取材で訪ねたのだ。卒業して以来だから、6 年ぶりになる。ちっとも変わらないその雰囲気に、当時のことを色々と思い出した。プロの研究者と数年を過ごすうちに実感できたことの一つは、「科学の発見は、果てしなく地道な研究の先にある」ということだった。それは、途方もなく大きなモザイク画をつくる作業に似ている。何ヶ月、あるいは何年もかけ、ある一区画の色を塗る。それを何千枚、何万枚も繰り返し、遠くから眺めたときに初めて、いったいどんな絵なのかがわかるのだ。たぶん、わたしは一枚一枚の絵を塗っていく「研究者」という仕事の魅力も感じつつ、あっちこちのモザイク画を遠くから眺め、「こんな面白いことがわかって来たぞ！」と伝える仕事をしてみたいと思ったのだ。

そうして今の仕事に就いた。しかし、実際に仕事の軸となるテーマは、想像していた「基礎研究をわかりやすく」というよりは、いわばもうちょっと“社会派”なものだった。初任地の広島では、原子爆弾の被害にあった方々を取材。その後異動した福井では、東日本大震災後の原発立地地域の人々の複雑な思いを聞かせていただいた。そして今では東京で、主に原発の廃炉に関わる取材を行っている。

学生時代には想像していなかった「科学と社会」というテーマ。その意義を教えてくれたのは、福井のとある主婦の方だった。原発の再稼働に関わる番組で、地元の人に駅やスーパーなどでとにかくお話を聞きまくる、という仕事を担当した。こわいからやめてほしい、仕事なくなるから早く再開

してほしい……。様々な声がある中、スーパーの袋を抱えたある主婦の方は、わたしたちへの期待を話してくれたのだ。「こんなに近くに住んでいるのに、原発って、結局どうやって動いていて、今どうなっているのか、全然わからないんですよ。知りたいけど、何をどう調べていいやら……。だから、テレビには、期待しているんですよ。」それを聞いて純粋に嬉しかったし、身が引き締まる思いだった。「小難しい」内容ではあるが、確かに一定数の方に「求められている」ことを実感したのだった。

その後も、原発や廃炉について、難しい話題をやさしく解説することを目指した番組を作った。撮影や編集をしながら、ふいにあの、スーパーの袋を抱えた主婦の方を思い出す。福島での原発事故以来、科学が自分たちと「関係ないもの」では済まされないものだという空気が一層高まったように感じる。そんな中で、「研究者」という生き方からは随分離れたものの、仮にも「科学で飯を食っている」ひとりとして、いまの世の中で自分にできることをやっていきたいと改めて思うのだ。



### 大石 寛人

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座 SC1 修了（5 期）。  
2011 年、日本放送協会（NHK）に入局。広島局、福井局を経て、現在は東京の科学環境番組部に所属。

## 活動紹介

科博 SCA の会員は、サイエンスコミュニケーションに関連するさまざまな活動を行っています。今回は、日本人研究者のノーベル賞受賞にあわせて開催されたサイエンスカフェと、サイエンスコミュニケーター養成実践講座のプログラムの一部として開催された2つのトークイベントをご紹介します。

### サイエンスカフェ「結局なんなの？ “オートファジー”」

(2016 年 12 月 17 日開催)



サイエンスコミュニケーションチーム「わちゃっと」では、昨年 12 月に「オートファジー」をテーマにサイエンスカフェを開催しました。東京工業大学の大隅良典先生がノーベル生理学・医学賞を受賞されたご研究のテーマです。ゲストには、大隅先生の研究室に所属されている若手研究者の持田啓佑さんをお迎えしました。ノーベル賞受賞の裏話から始まり、後半は「オートファジー」の研究について掘り下げました。参加者はゲストと同世代の方が多く、テーマもホットだったため、当日のトークは非常に盛り上がりました。また今年も、タイムリーな話題でカフェを開催したいと考えています。

(科博 SCA サイエンスカフェ分科会 明石 雅子)

### 「野生動物捜索中！」

2016 年度 SC 講座受講生ディスカバリートーク その① (2016 年 8 月 17 日開催)



私は、野生動物、特に哺乳類の野外の痕跡からわかることをテーマにお話をしました。野外で動物の直接観察は難しいので、野生動物の研究では、糞などの痕跡をよく用います。トーク中は、言葉は喋るだけにして、スライド上に糞や足跡などの写真 1 枚を大きく見せることで、参加者を飽きさせず、終始楽しんでいただくことができました。写真のみで何かを説明することは、初の挑戦だったので、トークのストーリーはとても悩みましたが、小学生たちの「楽しかった！」というコメントがとても嬉しかったです。

(SC 講座 11 期修了生 林 航平)

### 「ともに守るサンゴ」

2016 年度 SC 講座受講生ディスカバリートーク その② (2016 年 8 月 17 日開催)



「サンゴの海から SOS!!」と題し、海の生態系を支えるサンゴが、今どのような危機に直面しているのかお話ししました。写真や地図からサンゴ礁の変化を読み取る、という視覚的な体験を通じて、減りゆくサンゴの様子を実感していただけたと思います。サンゴを増やす方法についても議論することができ、参加者の皆様から、新たなアイデアや励ましの言葉をいただきました。さまざまな立場の方々と、ともにサンゴ保全研究を発展させていくことの重要性に気付かされました。

(SC 講座 11 期修了生 加藤 伶奈)

### 【お知らせ】科博 SCA のロゴマークが完成しました



このたび、科博 SCA のロゴマークが完成しました。デザインをしたのは、科博 SCA 会員の藤原亮太さん(SC 講座 10 期修了生)です。それぞれの円は輪すなわちコミュニケーションを、円が大きくなっているのは活動の広がりを表しています。中央の円は、科博 SCA の出発点である国立科学博物館を表しています。また、それぞれの円はフィボナッチ数列の各項を半径にもつ円弧上に配置されており、理論や秩序、美を大切にするという想いを込めています。このロゴマークのように輪を広げていけるよう、科博 SCA はこれからも活動を続けてまいります。